

今週の為替相場見通し(2025年11月4日)

総括表	(円)	先週の値動き			今週の予想レンジ	
		注	レンジ	終値		
米ドル	(円)		151.54 ~ 154.45	154.00	153.00 ~ 156.00	
ユーロ (1ユーロ=)	(ドル) (円)		1.1522 ~ 1.1669 176.70 ~ 178.80	1.1533 177.75	1.1400 ~ 1.1600 176.50 ~ 179.00	
英ポンド (1英ポンド=)	(ドル) (円)	*	1.3097 ~ 1.3368 200.57 ~ 204.24	1.3170 202.54	1.3000 ~ 1.3300 200.00 ~ 205.00	
豪ドル (1豪ドル=)	(ドル) (円)	*	0.6524 ~ 0.6617 99.42 ~ 101.21	0.6547 100.80	0.6450 ~ 0.6680 99.50 ~ 102.00	

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

国際為替部 為替営業第二チーム 松木 悠馬

(1)今週の予想レンジ: 153.00 ~ 156.00 円

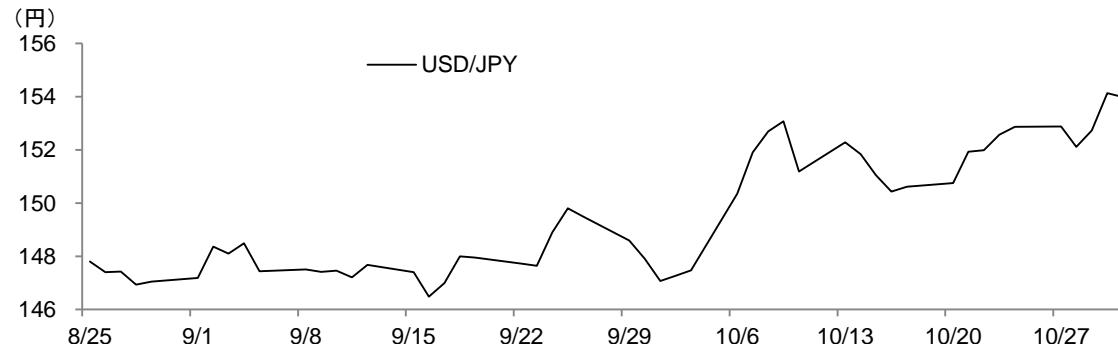
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は、日米の中銀会合通過後に急上昇した。週初27日、153.05円でオープン。週末のベッセント米財務長官の発言を受け米中対立の緩和が意識された。全般的な株高地合いがサポート材料だったが、主要イベントを前に153円を挟みレンジで推移した。28日、ドル/円は日米財務相会談に関する声明報道が意識され152円を割り込んだ。その後は米10月コンファレンスボード消費者信頼感指数や中東情勢に関する報道をこなしつつも、152円を挟んだレンジ推移に終始した。29日、ベッセント米財務長官による日銀に関する発言を受け週安値の151.54円まで下落も、「日銀が10月利上げを見送る公算」との報道を背景に152円台を回復。FOMCでは市場予想通り▲25bpの利下げを決定もパウエルFRB議長会見にて12月利下げが確実ではない旨示されると米金利上昇を伴い一時153円台まで上昇。30日、序盤は日銀金融政策決定会合への警戒感から152円台前半に下落も、政策金利の据え置きが決定されると153円台に反発。植田日銀総裁の会見がハト派な内容だったことを受け週高値の154.45円まで急伸した。31日、片山財務相による円安牽制発言をこなしつつも月末のフロー主導での値動きに154円を挟み方向感なく推移。結局154.00円で越週した。週明け11月3日は米10月ISM製造業景気指数が市場予想を下回ったことを受け154円台を割り込む場面もあったが、複数のFRB高官から12月利下げに対して慎重な姿勢が確認されたことから154円台を回復している。

今週のドル/円相場は堅調な推移を予想する。今週は5日(水)に米10月ADP雇用統計、米10月ISM非製造業景気指数が公表される予定。米政府閉鎖が継続し、民間を除く米経済指標が公表される見通しが立たない以上、12月FOMCを巡って決めて打ちできない状況が続いている。とはいえFOMC後のFRB高官発言では相次いで12月利上げに慎重な姿勢が確認されており、前述した米指標の結果次第では現状7割程度織り込まれている12月利下げを剥がす動きにドル買いの反応が強まりそう。他方、日銀金融政策決定会合では政策金利を据え置いた他、展望レポートや植田日銀総裁の会見においても次回会合に向けてのヒントが得られなかった。高市首相の支持率が高まっている状況下、解散総選挙の可能性も捨てきれず、本邦の政治状況にも注意深く見守る必要があるだろう。こうした本邦の政治的な状況も相俟って短期的に日銀がタカ派的政策を打ち出せないと想定している。市場が警戒している155円に迫る際など円安牽制発言を警戒しつつも、ドル/円は高値を目指す展開となろう。

(3)先週までの相場の推移

先週(10/27~10/31)の値動き: 安値 151.54 円 高値 154.45 円 終値 154.00 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

国際為替部 為替営業第二チーム 山田 隆広

(1)今週の予想レンジ: 1.1400 ~ 1.1600 176.50 ~ 179.00 円

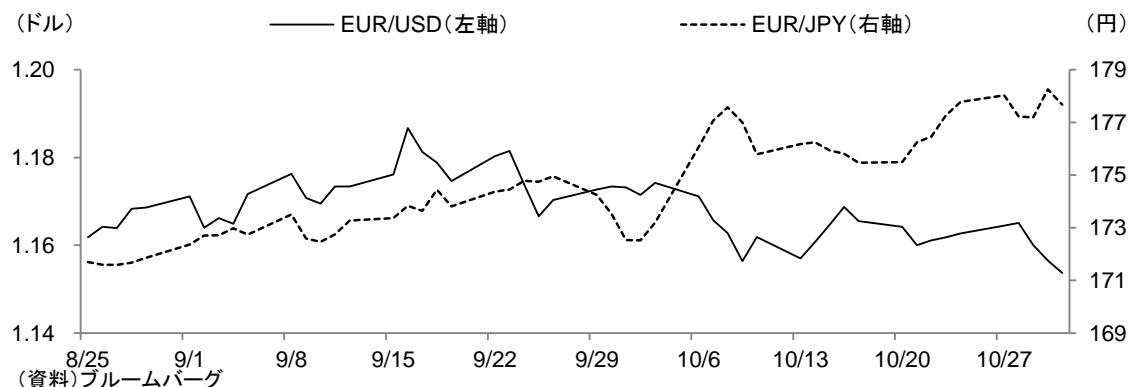
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは、週後半にかけて急落。週初27日、ユーロ/ドルは東京時間1.1632でオープンし、米金利低下に連れて1.16台半ばまでじり高で推移。28日、米金利の反発する動きに併せてユーロ/ドルは一時1.16台前半まで下落するも、堅調な株式市場を横目に週高値1.1669まで上値を伸ばす。29日、FOMCは市場予想通り▲0.25%の利下げを実施も、パウエルFRB議長が次回FOMCでの追加利下げに慎重な姿勢を示したことなどからドルが急伸、ユーロ/ドルは1.16台を割り込んだ。30日、底堅いユーロ圏7~9月期GDPの結果やECB政策理事会が市場予想通り政策金利を据え置いたことから、ユーロ/ドルは一時1.16台半ばまで値を戻すも、その後は米金利急騰に連れて1.15台半ばまで急落。31日、ユーロ/ドルは堅調な米経済指標の結果を受けて週安値1.1522まで下落したのち、小幅に値を戻し1.1533で越週。11月3日のユーロ/ドルはオセアニア時間に1.1539でオープン。高止まりする米金利や市場予想を下回った米10月ISM製造業景況指数の結果などを受け、ユーロ/ドルは1.15台前半で売り買い交錯し、1.1520でクローズしている。

今週のユーロ/ドルはじり安を予想。米中首脳会談を無難に通過し、米中対立深刻化懸念はひとまず後退。米政府機関の一部閉鎖が長期化の様相を呈すると実体経済の把握にはデータ不足感が否めず、次回米欧中銀会合まで時間的余裕がある中では、茲許の米株高などリスクオンの地合いにドルが買われやすいとみる。もっとも、当面の金利据え置きを示唆するECBと指標次第ではあるものの追加利下げ余地を残すFRBといった金融政策面での対比から、ユーロの下値は限定的となろう。今週は、5日(水)発表予定のユーロ圏9月PPIでは前年比でマイナス幅の縮小が、6日(木)発表予定のユーロ圏9月小売売上高では前年比ほぼ横ばいと、景気の緩やかな回復が予想されている。ラガルドECB総裁は、先週のECB政策理事会直前に食品インフレの高止まりを指摘、域内サービス業を中心に底堅さは見られるものの、仮政治情勢悪化や独経済の低成長率継続などこれまでユーロ圏経済を牽引してきた主要国において景気減速懸念を孕むなかで、指標が下振れた際のユーロ売りを想定しておきたい。片や、米国サイドでは7日(金)に予定される米10月雇用統計は発表延期が現実的であり、公式データが依然として不透明なもとでは、茲許の堅調な企業決算を好感したドル買いの動きは想定されるものの方向性を定めるまでとはいはず、大きく下落した場面ではユーロに押し目買いが入ると思われる。

(3)先週までの相場の推移

先週(10/27~10/31)の値動き: (対ドル) 安値 1.1522 高値 1.1669 終値 1.1533
 (対円) 安値 176.70 高値 178.80 終値 177.75



3. 英ポンド

欧州資金部 神田史彦

(1)今週の予想レンジ: 1.3000 ~ 1.3300 200.00 ~ 205.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

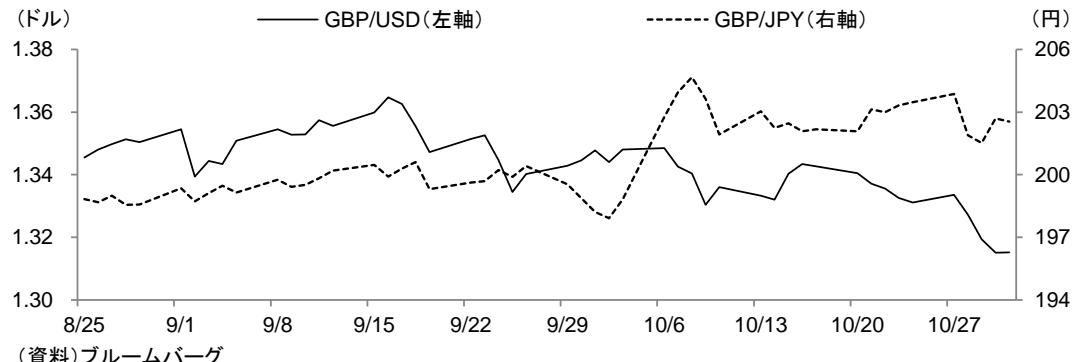
先週の英ポンド相場は上値重い展開。週初27日は1.33台前半で始まる。独10月IFO企業景況感指数が予想を上回り堅調なユーロにつれるが、28日は、英小売業協会が英食品のインフレが鈍化したと発表し1.33ちょうどを割れる。29日は、FOMCの結果を受けたドル買いに1.31台半ばへ下落。ドルの堅調が続く中、週末31日は1.31レベルに下落した。先週の英ポンドは、対円で下落。週初27日に203円台後半で始まると、204円挟んだもみ合い。しかし、28日の英ポンド下落につれて202円を割り込む。29日以降は、FOMCと日銀金融政策決定会合の結果を受けたドル/円の動きにつれて203円を挟んだ値動きに。週末は、続く英ポンドの下落圧力もあり202円台に下放れた。

今週の英ポンド相場は、上値重い推移継続を見込む。先週のFOMC以降、米追加利下げ観測が巻き戻される中、英指標面からは6日(木)の英中銀の金融政策委員会が注目される。22日の英9月CPIの予想比下振れで英中銀の年内利下げ観測が再燃してはいるものの、スワップ市場の織り込みは3割程度。一方で、当行ロンドン支店のストラテジー部門ヘッドのロチェスターは5対4の僅差での11月利下げを見込んでいる。ペイリー英中銀総裁を含め、英労働市場の弱さを懸念する傾向が高まっており、向こう2年のインフレ見通しも2%を下回っていることもあり、その結果を予想する背景となっている(さらには翌年2月に追加利下げが行われ、一旦のターミナルレートの3.50%となる、というのが彼のメインシナリオのことだ)。現状の市場のエコノミスト予想も据え置き予想が大勢であり、利下げとなつた場合は英ポンド売りで反応するだろう。また、結果据え置きとなつたとしても、票割れがハト派的と捉えられると12月利下げを見据えて英ポンドには下落圧力がかかりやすい。

(3)先週までの相場の推移

先週(10/27~10/31)の値動き: (対ドル) 安値 1.3097 高値 1.3368 終値 1.3170

(対円) 安値 200.57 高値 204.24 終値 202.54



4. 豪ドル

国際為替部 為替営業第二チーム 大島 経貴

(1)今週の予想レンジ: 0.6450 ~ 0.6680

99.50 ~ 102.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

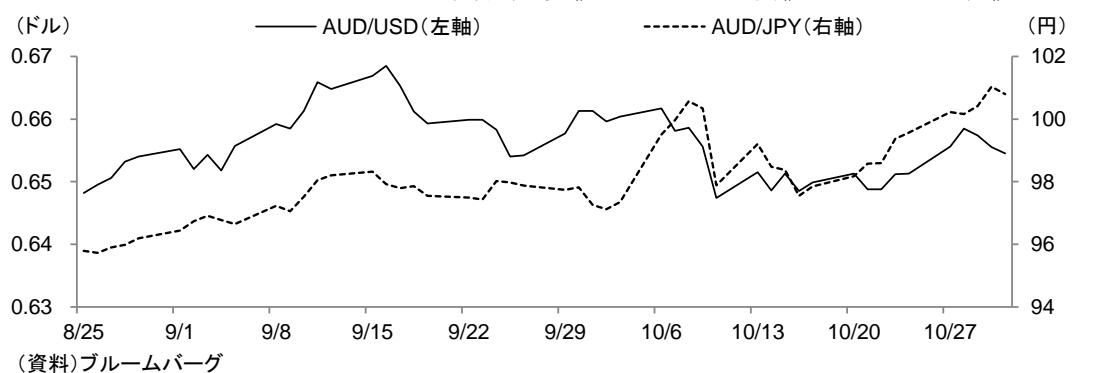
先週の豪ドル/ドルは往って来いの展開となった。週初27日、0.6535でオープンした豪ドルは週末のベッセント米財務長官の発言から米中貿易戦争激化の懸念が後退したことが好感され、0.6559まで上昇。ブロックRBA総裁発言を受け利下げ期待が後退したこと、豪ドルを押し上げた。28日、米経済指標の堅調な結果に終わるも、影響は限定的、豪ドルは小幅に上昇した。29日、豪7~9月期および9月CPIの市場予想を上回る結果を受け、豪金利上昇とともに、週高値となる0.6617まで急伸。一方で、FOMC後のパウエルFRB議長の会見を受け、米利下げ織り込みが剥落したこと、0.65台半ばまで反落した。30日、米金利が低下に転じると、豪ドルも小幅高となった。もっとも米金利が反転上昇すると0.6533まで反落した。31日、翌週に11月RBA会合を控えるからか、0.65台半ばでの取引に終始し、結局0.6547でクローズした。

今週の豪ドルは堅調な推移を予想する。今週は、3日(月)~4日(火)に11月RBA会合が予定されている。政策金利の据え置きは既に市場でも織り込まれており、反応は限定的となりそうだ。前回9月会合ではインフレが加速に転じたことを受け、政策金利の据え置きを決定。ブロックRBA総裁の発言からもインフレに対する警戒感が高まっている様子が伺えた。足許、RBAが伝統的に重視してきた四半期ごとのインフレ指標である豪7~9月期CPIも加速しておりインフレへの危惧は不变だろう。加えて、雇用の軟化が見られる中でも「失業率の急上昇はサプライズだが、月次データは変動が大きくなり得る」とのブロック総裁の発言もあり、インフレ抑制の優先が仄めかされている。タカ派的姿勢の継続が見込まれることは、豪ドルの下支えとなるだろう。翻って、米国で先週開催されたFOMCでのパウエルFRB議長会見では、12月会合での利下げを織り込んでいた市場予想比タカ派だった。もっとも、米政府閉鎖が続き、重要経済指標の発表延期が見込まれ、加えてFed高官内でも利下げパスへの意見対立が見られる中で、利下げ織り込みが急速に剥がれるとも考えづらく、ドル高の材料は限定的だろう。

(3)先週までの相場の推移

先週(10/27~10/31)の値動き: (対ドル) 安値 0.6524 高値 0.6617 終値 0.6547

(対円) 安値 99.42 高値 101.21 終値 100.80



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようにお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。